

平成24年度学力向上に向けた取組

函館市立弥生小学校 学級数 10

アプローチの視点に基づいた、「組織的」で「つながり」（学びの連続性・学校内外の連携）をもった取組
重点教育目標

”心のつながり”を広げ、生き生きと活動する子

A 各教科・領域等における系統性や、他の教科・領域等との関連に配慮する

B 長期的な見通しをもって、学習内容を確実に定着させる

C 校内研究の進め方を見直す

D 授業公開や外部への公開・発信を生かす

取組の概要

1 校内研修の見直しの取組

(1) 取組のきっかけ

今年度より新たな研究主題「活用する力を身につけ、表現力を高める指導の工夫（2年次計画）」を設定した。そこで、研究部の提案を中心に、様々な角度から精力的に研究を進めていくために、効率よく、参加者全員が研究協議で意見交流できるようにワークショップ型の研究協議を行うことにした。

(2) 取組の位置付け

研究部が中心。児童や家庭に発信していく場面では教務部と連携。

(3) 取組の方法

【改善策提案型ワークショップ】

① 付箋記入（10分）

・協議に入る前に10分程度で、授業の成果（赤）改善点（青）の付箋に記入。

② はじめに

・司会者から ・授業者から ・授業者への質問

③ グループ協議（4人程度 3グループ 15分）

・成果、改善点について、指導案に付箋を貼りながら交流する。

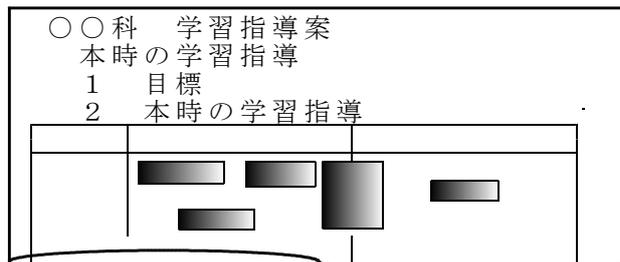
※ グループ内で司会者、グループ発表者、記録者を決める。

④ グループ交流（15分）

・各グループ発表
・各グループで使用したシートを使い成果、改善点について発表。

⑤ まとめ

・研究の成果と課題のまとめ
・マトリクス法で、各グループの付箋をまとめる。



マトリクス法

	視点1	視点2	その他
成果			
改善点			

2 学力向上の視点から～系統性の関連に配慮する取組～

本校の学力向上の視点から上記A「各教科・領域等における系統性や、他の教科・領域等との関連に配慮する」について

(1) 取組の流れ

① 6年生「全国学力・学習状況調査」とともに2～5年生でCRTを実施（4月）。

② CRTの結果について、①全校的な傾向、②学年の傾向、③改善点の3つの視点について分析と考察を提案（7月）。

③ 学力向上についての学習会を学級経営中間交流会とともに実施（夏季休業中）。

※ 各学年ごとに、通過率の悪い問題等について発表→意見交流→課題の共有

④ 保護者に向けて全国学力・学習状況調査および校内学力検査結果（概要）について、本校の傾向と改善策を発信（2学期）。

※ 今年度は、このタイミングで「家庭学習のてびき」を保護者向けと児童向けに分けて、それぞれ配付の予定。……教務部と研究部の連携

(2) サポートの体制

① 取組の流れとは別に、全学級で算数TTを実施。

② 生徒指導部提案の事例研修会と連携し、普通学級においても支援を要する児童についてあげてもらい、「子どもサポート委員会」を立ち上げる。

↓
具体的には、専科およびTTの教師、特別支援教育支援員が支援を要する児童に対して、学習への支援を継続的に行う（算数に限らず、児童の状況に応じて国語等、他の教科にも対応）。

1. 校内研修の見直しの取組

○ 取組の成果

・ワークショップ型によるグループ協議の実施

低・中・高学年の3グループ（1グループ4～5名）に分かれて協議を進めた結果、意見や感想が多く出され、グループ交流の活性化につながった。交流しやすい人数であったことも活性化の要因と考えられる。

・マトリクス法の実施を活用した全体交流会の実施

研究の視点の明確化につながったと思われる。また、付箋を活用することで意見が形として残るところによさが感じられた。さらに各グループから共通の意見が出されることで、取り組む内容の重要度や今後の取組に対する優先度が見えてきた。自分のグループには無かった意見を聞くことで、参加者全員が価値を共有（共通認識）できる成果があった。

○ 取組の課題

①マトリクス法の表に記載されている観点を「研究の視点」とした場合、観点としては広すぎて具体性に欠けてしまう恐れがある。また、研究の視点に向かう「方法」を観点にすると焦点化されすぎて、研究がどこに向かっているかが曖昧になりがちになる。研究主題、仮説、研究内容、方法等のつながりを吟味し、理解していくことの重要性を感じた。

②様々な意見が出され、付箋も多く貼られるが、それらをどのようにまとめて今後の実践に生かしていけるか。そして、今後の研究推進にどう活用していくかが難しい。また、すぐに取り組めること、今年度中にできそうなこと、次年度以降にできそうなことなどを、取組の優先度とリンクさせながら考えていかなければならない難しさも感じた。

2. 学力向上の視点から

○ 取組の成果

・「学習会の実施」と「家庭学習の手引きの作成」

2年生～5年生によるCRTの結果について分析と考察を行った。それを受けて学習会（各学年が通過率の悪い問題を中心に傾向を発表、全体での意見交流を行う）を実施したことで、課題が共有された。また、研究部と連携し、家庭学習の手引きを作成、各家庭に配付した。手引きについては本校の研究とリンクさせるとともに、授業や宿題等とのつながりが見えるような内容を心がけた。作成については研究部が提案し、校内研修を通して全体で検討できたこともよかった。

・サポート体制の充実及びサポート委員会との連携

全学級での算数TTとは別に、専科、TT、特別支援教育支援員の3名体制で支援※を要する児童に対してかわるとともに、支援ファイルの作成、記載を通して学級担任との連携を図ることができた。また、子どもサポート委員会を定例化し、委員会のメンバー以外の先生方も例会への参加を自由にした。特に学級担任が抱える悩みを中心に、座談会的に話を進め内容を共有し、解決に向けた糸口や方向性を話し合うことができたことは一定の成果であると考えている。

※子どもサポート委員会と上記3名体制でのサポート体制は連動している。

○ 教育課程検証の方法

1. 学力向上の視点にかかわって

（1）確かな学力の向上

・全国学力学習状況調査（6年生）と学力検査（2～5年生）CRTを実施し、学力検査の集計と分析を行った。夏季休業中に各学年から、通過率の低い問題や学年の傾向を交流する学習会を開催し、共通理解を深めた。また、学力検査の結果と学校としての取組（改善策等）とともに、本校の校内研修ともリンクさせた「家庭学習のてびき」を保護者に発信した。

・H22に実施した保護者アンケートをもとに児童の実態の把握に努めた。そして、それらをもとにH23に学習面や生活面を中心に家庭向けのリーフレットを作成、配付し、家庭への理解と協力を求めた。今年度は、配付したリーフレットの内容を保護者アンケートの評価項目へ盛り込み、児童の実態の把握とともにリーフレットの内容の検証を行う。

・学力向上については、授業と宿題、家庭学習を効果的にリンクさせていくことや、学校全体として意図された効果的な「朝学習」の在り方等、校内研修を通して話し合った。また、チャレンジテストの計画的な実施により「知」の側面で定着を図っていくこと、長期休業中における補足的・発展的な学習の実施、朝読書の実施と日常的な読書を奨励し読書に親しみ、子どもたちの言語活動の一助としていくなど、検証・改善については多岐にわたる。

（2）新学習指導要領にかかわって

・「何が変わったのか」学習会を行い理解に努める(H23)。例えば、算数における言語活動って何？など、実際の授業を想定した具体的な内容を取り上げるなど。

・昨年度の実践をもとに、「学習評価の改善充実」（道教委）等も参考に年間指導計画についての見直しと改善(朱書き)。

・学習内容の増加 → 教育課程編成において余裕時数を増やす工夫。

※欠時を減らす（個人懇談会→午前授業× 短縮5時間○）※行事の捉え方（遠足→総合的な学習の時間への位置づけ）※クラブ活動の外出し（週の授業時間の外へ）

・TTの有効活用として、専科・TT・特別支援教育支援員の活用。

※子どもサポート委員会との連携

・よりどころは「アプローチ」

※わかる授業を積み重ね、知識・技能の定着から活用していける力を養っていけるように。また、その道筋を側面から支える言語活動やICTの活用、

TTや校内研修などとリンクさせた実践に努める。

